
ハツコイ

心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハツコイ

【Zコード】

Z8489A

【作者名】

心

【あらすじ】

初投稿の短編「ハツカレ」「ハツカノ」のゆうとたくちゃんが、出会つてから恋人になるまでのお話。それぞれ存在さえ知らない所で、それぞれが別の人との恋愛に悩んでる所から書いてみました。連載は始めてで、ちょっと緊張してますが、頑張つて書いて行きました！よろしくお願いします

夜祭（夕貴の夜）

「夕貴、今夜の夏祭り行こうよー。」

「えー、さなみとあたしと、一人で？」

「あのねあのね、お祭りのたこやきの屋台にね、あの雪斗くんが店番してんだってー！」

咲波にその情報をもらつて、わたしはすぐれおタンスから浴衣をいくつも引っ張りだした。

心臓がばくばく鳴つた。

だつて、夏休みにまで雪斗くんに会えるとは思わなかつたから。

あ……。

はつとしてわたしは手を止めた。

重く圧し掛かるようなため息が出て、胸が痛くなつた。

「…………」

咲波は、その情報じつから手に入れたんだろう。

最近、嫌な事を考える。

考えれば考えるだけ、その予測は一つずつ確信に変わつていいく気がして、

怖くて怖くて、戸惑う。

でも、わたしは雪斗くんに会いたいよ。

だから行く。お祭りだ。

「夕貴！わあ、浴衣めっちゃ可愛いじゃん！」

「本当？ありがとう…恥ずかしいな」

六時に神社の入り口で咲波と待ち合わせした。

咲波は浴衣は着てなかつたけど、細身の長身には、どんな服も綺麗に着こなす力がある。短いスカートが似合つ。顔も美人だし、綺麗な髪を結い上げていて、とても色っぽいと思つた。

「ゆー、ちゃんとお腹空かせてきた？」

「なんだ？」

「なんでって、だつて、たいやきこつぱに食べなきやじやん…」

「あ……や、そつか」

「ぼーつとしちやつて大丈夫??」

咲波がくすくす笑つてわたしの頭を撫でた。胸がズクンつて痛くなつた。

咲波は、中1の頃からのわたしの友達。

この春から、一緒に皐月高校に通つてゐる。雪斗くんも一緒に、中2でわたしが雪斗くんを好きになつてから、

今までいっぴいいっぴい協力してくれて……。
優しくて、大人で、わたしの大好きな親友。

ねえ、咲波……わたしに、無理させてるかな……。

「あ、あの屋台じゃない？」

「え？」

「あ、やつぱり！ 夏貴、ほんとに雪斗くんいるよ……。」

「え、何処どこ……？」

人ごみに田を凝らすと、わたしの田に、確かに映った。
心臓がバキンと鳴った。

うわ……本当に、本当に雪斗くんだ……。

すくぐるぎをして、思わず手に汗を握ってしまつ。
たまらない緊張感が全身に走る。

雪斗くんは、さわやかな笑顔で、元気にたこやきを売つていた。
頭にタオルを巻いて、汗いっぱいきて。

普段、学校では見られない姿に、わたしの興奮はもくもくと増すばかりだ。

「行こう、夏貴！」

「え……え、ええー」

咲波がわたしの手を引いて、ぐんぐんたしゃせの腰をひねってこべ。
ちよ…、ちよつと待つて…。

まだ心の準備が…

「ゆきちゃん…。」

……

わたしの胸は、またズクン…って痛んだ。

なに…今の

「よー、咲波とタちやんじやん…。」

「ゆきちゃんがちやんと動いてるか見に来たんだよー。」

「マジで? びう、サマになつてるか?」

「ううう、思つたよつマジメに動いてるじやん…。」

咲波はわたしの手を握つたまま…握つたまま、
わたしの事なんて、忘れちやつてるみたい。

わたしはただ、雪斗くんと咲波が楽しそうに話しての姿を、
ひどく痛む胸と頭の中で、ただぼんやりと見ていた。
見てるしかなかつた。

……何これ、何コレ……。

逃げ出したいよ……ほんの、絶えられないよ。

咲波から、そつと手を抜いた。

咲波はそれでも気が付かない……。

わたしは涙で視界がぐらぐらして、唇が震えた。

ぐにゃぐにゃの視界に微かに映った、極めつけの映像……

雪斗くんが、咲波の耳に何か囁くように、そつと耳に、キスをしたこと……

咲波が振り返る寸前に、わたしはその場から離れた。いろんな気持
ちでぐしゃぐしゃだった。

こんな痛いの、初めて。

夜祭（拓哉の夜）

今日は夏祭りがあるそうだ。

でも、俺はあんまり行く気なんてない。

部屋で「ロロロロ」と鳴ると、やつぱり鳴った…ケータイが。
そしてやつぱり予想的中。

友達とゆーか、幼馴染の智輝からだった。

智輝と5時半に神社の入り口で待ち合わせた。
こうして毎年毎年、祭りに連れ出されるのは恒例だった。

神社の石段に座つてうちわをパタパタしてると、
聞きなれた声が俺を呼んだ。

「拓哉……遅くなつてごめんちや……」

見慣れた自転車で、人を避けながら智輝が迫つてくる。

……ん？

「あー……ああ、また余計なことを……」

智輝と一緒に視界に移つたものに、
思わずテンションがガタ落ちした。

だから行きたくなかったんだよなあ……今年の祭。

智輝が俺の目の前に自転車を止めた。

「やあ、やあ、遅くなつて」めん！」

「ああ

俺はぶつかり棒に答えた。

「こんばんわ、拓哉くん！」

「…………」

智輝の自転車の後ろから、浴衣を来た女の子が飛び降りた。明るい茶髪を結い上げて、深い紺色の浴衣が、派手めな彼女の顔立ちに

とてもよく合つてゐると思つ。

俺を見てやけこなつしている。

……分かりやす過ぎだつての。

「亜由古、智輝に誘われたんか？」

「うーん、まあそんなどこ」

「へー……」

俺は思いつきり智輝を睨んだけど、まんまと気付かないフリされた。

「行こうよ、わたし水あめ食べたい！」

「お、お、引っ張んなよ

亜由子が思いつきり俺の腕をつかんで引っ張つた。

ひりつと後ろを見ると、人ごみの中で、

ただ立つたまま、智輝が笑つて俺たちを見てた。

ついてこない氣だ……。

物凄く胸が痛くなつた。

息を呑んだ。だから、嫌だつたんだ。

あんまり水あめを欲しがるから、
亜由子に一本買ってやつた。

ひと氣のない静かな石段に腰を下ろして、
一人で食べた。

亜由古とは、今年入学した風波高校で同じクラスになつた。
入学当初から、顔立ちの明るさと、性格の活発さで男子から結構人

氣がある。

俺だつて、可愛いと思つた一人。

席が近くになつた頃から仲良くなつて、
いつの間にか、俺といつも一緒にいる智輝とも友達になつたらしい。

智輝は何も言わないので、俺はすぐに分かつた。

智輝が亜由古に惚れた事。

……そして、智輝が俺に、その心を打ち明けない理由も、知つてる。

亜由子はやつと、俺の事が好きなんだって事。

智輝は俺が色々気が付いてること、やつと何にも知らない。
でも、亜由古が俺を好きなことは多分知ってる。

今日のことだつて含めて、

アイツは俺と亜由古をやたらとつねりつねりするんだ。

「拓哉くん？」

「…………ん？あ、わらい…………」

「ぼーっとしてるけど、大丈夫？？」

亜由古がくすくす笑つた。

「…………」

「え…………。…………な、…………なに？」

亜由子が俺の顔を、いきなり真剣をして顔で覗き込んできた。

「…………」

あんまりじつと見てくるから、

照れるやつ、気まずいやつ、変な空氣が流れる。

「あ、なんだよ」

「…………」

次の瞬間、

畠由古の顔が迫ってきて、俺は田を見開いた。

「畠由古ー。」

畠由古の肩をつかんで叫ぶと、はつとした様に俺を見てきた。

「たぐ、どうして…？」

「な、何が？」

「…………ううん、なんでもない」

あゆはやがり言ひて、顔を伏せた。

キスされたんのかと思った。
まだ心臓がばくばくしてる。

「…………」

ため息しか出ない。

友達に遠慮してなんなんて、ほんとダヤーな…。

「なあ、あゆ、智輝探しに行こーぜ」

「…………そだね」

俺たちはまた、屋台の並ぶ人の波の中に戻った。

本当は気付いてる。

俺の煮え切らない態度が、智輝と畠由子を苦しめてる事。

付き合えないなら、振つてやればいいの!!。

それも出来ないのは、やっぱり俺も、畠由古が好きだからかもしない。

智輝の顔が、見れなくなるのが、怖いのかも知れない……。

どれぐらい歩いただろ？。

いつの間にか、さつき咲波と待ち合わせをした、
神社の入り口付近まで戻ってきた。

……さつきから、巾着の中でケータイが震えっぱなし。
咲波が心配してかけてくれてるのが分かる。

でも、ごめんね。

今はどうしても出られないよ……。

さつきの光景を、

思って出すと涙が溢れる。

怖いぐらいに目からぼろぼろ大粒が溢れて、
頬を伝い、顎に溜まって、

自分の足に、零がパタパタと落ちては弾けてく。

苦しくて、苦しくて、どうしたら良いのか……。

トントン……。

わたしは驚いて振り向いた。
誰かに後ろから肩をたたかれた。

だ、だれ…

全然知らない男の子が目の前に立っていた。

男の子はイキナリはつとした顔して、
今度はたじろぎ始めた。

「あつ……い、こきなりー」めん…！」

「？？？」

「あの、な、泣いてたから…」

「…？」

「すつご」に泣いてるから、……」

「…………」

「だ、大丈夫？なんかあつたん？つて、俺なんかキモいよね、ごめんね！」

で、でも別にナンパとかじやないんだよ？あ、あの…
わたしはぐらぐら揺れだした視界の中で、
必死で首を振った。

何、この人……。

そう思つた途端、目がすつごい熱くなつて、
驚いて止まつたはずの涙が、一気にあふれ出ってきた。

わたしたちは屋台の列から外れた、
少し静かな場所でベンチを見つけて座った。

先に口を開いたのは、彼の方。

「少しは落ち着けた？」

「…………うん」

「「めんね、俺がビッククリさせちゃったから」

「……ち、違うよ…」

わたしの反応に少し驚いて、

男子はくすっと笑つて見せた。

「良かつた。話せそうだね」

「うん、もう大丈夫…ありがとう」

なんか、本当に少し落ち着いた気がする。

不思議。

第一印象は、チャラチャラした
お調子者タイプのかなつて思つたけど…
見た目もなんか派手だし…。

金色っぽい茶髪に、肩耳だけでピアスが3つも。
でも、男子の癖にまつ毛が長くて綺麗。
見た目こんな人なのに、
今は、ビックリするほど落ち着いた空気を持っている。

「 „ ゃ’ひゃ „ つて言ひのへ、名前」

相手の声にまつとした。…ぼーっとしたみたい。

「つ、うん。……何で名前？？」

「巾着に刺繡が入つてゐる」

あ、そっか…驚いた。

「俺は智輝つてゆーんだ。近所に住む高校1年生！」

「えつ、おんなじ！わたしも近所に住む高校1年生…」

「マジで？」

二人して笑つた。

それからわたしは、

泣いている理由を智輝くんに話した。

ともくんは、ただ黙つてわたしの話を聞いてくれた。

咲波は中学で一番最初に出来た
大事な友達だとゆう事。

中一で雪斗くんを好きになつた事。

咲波の気持ちに気が付き始めた…
中二の夏…。

優しく変わらない咲波の態度に、
わたしも気付かないフリをしてきた事…。

雪斗くんの気持ちに気が付き始めた…

高校入学日前。

そして今日。

わたしは、咲波をずっと苦しめてきた事を
目の当たりにした。

咲波だけじゃない。

雪斗くんの事も、わたしはいつもと苦しめてる。

それが、自分の失恋よりも、耐えられないって事……。

「そつか……」

ともくんはそれだけ言って、
しばらく黙った。

少しして、ゆづく口を開いて、話始めた。

「俺もね、大事な幼馴染を困らせてるんだよね……」
「幼馴染？」

智輝くんは黙つて頷いた。

「そいつと俺、同じ高校なんだけどさ。」
「高校入って、アイツのクラスにめっちゃ可愛い子がいたんよ」

「うん」

「それで、アイツ繫がりで俺もまんまと仲良くなれたワケ」

「うん」

「男子に凄い人気あるんだよ。性格明るし、顔は可愛いし、スタイルも良い！」

「……はいはい」

「だからセ、……好きにだけはなりたくないなかったんだよね……」

「……」

「でもな、止められなかつたんだ、気持ちが…」

ともくんはケラケラつて笑つて見せた。

その笑顔に、思わず胸がちくんでした。

「……あの子が泣いてるところを見ちゃつたんだよ。たまたま見つけちゃつて……せつとけなくて。

彼女も出来たこともないくせにセ、『俺が守りなきや』とか思つ
ちゃつて」

「うん……」

「……その時、せばに寄り添つたとき、……好きだと思つた」

「……」

わたしが頷いた時、ともくんは両手で顔を覆つた。

それからじゅくじゅく、重い口を開いた。

「その泣いてる理由が……アイツの事だつた……」

「アイツ？」

「……俺の大事な幼馴染」

「……え……」

「好きだと気付いた瞬間に、彼女が見ている相手が俺じゃない事を

知つた。

……それから俺は、あの子と幼馴染を、意図的にくつつけようとばかりしてゐる。

毎日、毎日……そなへばかり。

今日だって、アイツを呼び出して、あの子を連れてきて。一人で祭りに行かせた。アイツの迷惑がつてゐる顔も気が付かないフリして……

「…………」

お互ひ、押し黙つたまま、何も言えなかつた。

やらなきやならない事がある事、…………知つてゐる。二人とも、ここで座つてゐるだけじゃいけないつて事。

座つてゐるだけじゃ……

「あ……拓哉!」

「…………たくや?」

わたしは顔を上げてともくんを見た。

ともくんは遠くから見ていた。

その視線を追つて、わたしも目を向けた。

一人の、背の高い男の子が、じつに向かつて歩いてくる。“たくや”と呼ばれた男の子は、まっすぐ、このベンチを手指して進んでくる。

何故か。

わたしはその様子を、まるでスローモーションでも見てるかの様に感じて、ただただ、ぼんやりと眺めてた。

「とも……てぬー、どんだけ探されれば気が済むと呟いてんだよー。」

とっても大きな声。

わざわざとわたし達の田の前までやつてきた。

「……………」

あ。

最後の言葉と一緒に、男の子の視線がわたしに向いた。
呆然と一人のやりとりを見てたわたしと、いきなり目が合つてしまつた。

「…………」

その人を見たとき。

わたしはその”瞳”に驚いた。

凄く綺麗で。凄く優しい。

深くてまだらな茶髪はさらさらしてて、
肩耳にだけピアスが開いてる。
よく日焼けした肌が男の子らしいと思つた。
第一印象…。

「あ、タ貴ちゃん。コイツが俺の幼馴染の拓哉だよ
「…………。…………？」

「そんで拓哉、この子は迷える子羊のタ貴チャン！」

ともくんはめっちゃ笑顔で、とっても明るく、わたし達を紹介した。
でも。待つて。
え……この人が……あの……。

「迷える子羊ってなんだよ」

拓哉くんが突然、カラカラと笑った。
あ……笑うと可愛いんだ。

「……拓哉。あ、亜由古は？」

ともくんがいきなり真剣な声で
言つから、ちよつとびっくりした。

……亜由古……あ、もしかして……。

「お前が全然見つからなくて、疲れて向こうで休んで待ってるよ。
浴衣なんだから、歩き回つたら大変だーが」

「あ……でも、探さなくて良かつたのに……」

ともくんがそう言つた時、

拓哉くんがパチン、つて彼にでこピンをした。

「馬鹿。俺たちは三人で祭りに来たんだり？」

「…………まあ……」

「亜由古に悪いと思つたら、罰としてお前迎えに行つて来い！
俺は疲れたからここので座つて待つて行け……！」

「で……でも……」

「亜由古は可愛いから、モタモタしてると変なナンパに……
拓哉くんがここまで言つた時には、
ともくんはもう走り出していた。

「まつたぐ……」

そう言って、拓哉くんがわたしの隣に腰をおろした。
わたしは、人ごみの中に消えていく
ともくんの後ろ姿を見てた。

亜由古ちやんの事が、本当に大切なって思った。

「ちい」

気が付くと、拓哉くんがわたしを見てた。
優しい笑顔。

心臓が、パキン…と鳴った。

「…………？」

「行こうか」

「？」

「ああ、立つて立つて！」

促されて、わたしは慌てて腰を上げた。

「…………なに？」

「俺と一緒にお祭り回りへ。チヨコバナナぐらーなら、貰つてあげられるよ」

やつぱり、またくしゃつて笑つ。

「お、お祭りつて……だつて……」

拓哉くんはケータイの電源を切つた。
それをポケットに戻すと、
まっすぐにわたしを見る。

そしたら……ほら、また笑う。。

「これで邪魔も入らない。 行こう」

拓哉くんに手首を掴まれて、
わたし達はまた人の海の中に飛び込む。

熱くて、明るくて、優しい。
光と音と、賑わいの中に……。

ねえ。

この時は気が付かなかつたんだよ。

わたしの手を引く大きな手。
しつかりした腕。肩。背中。

わたしをどんな気持ちにさせてたか、
まるで知らんぷりの笑顔。

悔しいぐらいの憎らしさが、

わたしの裂かれた心を暖かく埋めたこと。

オワツタ夜に、ハジマリがやつて来たこと……。

拓哉くんがわたしの手を離してくれたのは、本当にチヨコバナナの屋台の前だつた。

別に、食べたいって言つてないのにな。

「どれがいい?」

拓哉くんがにじにじして問ひ。

わたしは答えなかつた。

…いや、答えられない、のが正しいかも。
だって、ワケ分からなくて。
相当困惑してゐる。

でも…

奢つてくれるならもうひとつおひと頃ひ。

「じゃあ、ピンクのチヨコのやつ…」
「おひちやんー、ピンクのと、普通のけつだーーー。」
拓哉くんとおじいさんのやつとつを
ぼんやり見てゐしかなかつた。

さつきまで掴まれてた手首が熱い…。

何となく手首をさすりながら、深いため息をした。

「2本で240円ね。ルーレット2回まわしてくれ」

威勢の良いおじさんの声。

チョコバナナが並んでる台の横に、
ショボい機械が置いてある。

ボタンを押して、止まつた所がアタリなり、
表示されてる数をくれるらしい。

「あー、俺ハズレた！ 夕貴ちゃんは？ 一回押しな」

「あ、うん……」

拓哉くんに言われて、何となくボタンを押した。

「おお、お嬢ちゃんアタリだよ！」

「ええ！」

「夕貴！ す、」「いじちゃん！ 2本も！」

”夕貴” だって……。

わたしは、両手に一本ずつチョコバナナを持って、
両手に一本ずつチョコバナナを持った、拓哉くんの後ろを歩いた。

なんでこんな事してんだろ、わたしは。

巾着の中は、今も引っ切り無しに震えてる。

親友からの連絡はまるで無視して、
知り合つたばかりの男の子に、チヨコバナナなんて買つてもうつて。

わたしだけじゃないよ。

拓哉くんはもつと謎。

智輝くんと亜由古ちゃんは、きっと今頃心配してゐる。
戻つてきたり拓哉くんはいなくて、
一応、わたしもいなくて…。

おまけに、

拓哉くんはケータイの電源まで切つて。

何なの。

何なんだろう、ほんとに。

だんだん不信感が積もつてきた。

よく考えれば、いや、よく考えなくとも。
わたしはこの人の事何も知らないじゃん。

「ね、あの金魚すくいの前の花壇座る?」

拓哉くんが、ぐるりて振り向いて、
無邪気に聞いてきた。

…まだ何も答えてないのに。
もう座つてる。

仕方なく、わたしも隣に座つて
バナナをかじつた。

なんだかさつきから流されっぱなし。
でも。

流されても全然嫌な気がしないのが、不思議。

「「めんね」

わたしは拓哉くんを見た。

「「めん、なんか巻き込んで」
「.....」

彼は顔を伏せた。

あんなに笑った顔が暖かい人が、
今は息を呑むほど、寂しい顔をしている。

「智輝から、色々聞いたろ?」

「.....」
「.....」
「.....」
「.....」

嘘をついても仕方がないことは分かってる。
だからこそ、答えが見つからない。

「うん」て言えば良いのか。

「うん」て言えば良いのか。

ピンクのチョコバナナの最後の一囗を飲み込んで、

わたしは拓哉くんを見た。

目の前の屋台にゅらりゅらと泳ぐ、

小さな金魚たちを見つめていた。

「ねえ…どうして、ちやんと待つててあげないの？
一人とも、今頃きっと心配してるよ？」
わたしが問うと、彼はちょっとだけ驚いた顔をした。
きっと、わたしがずっと黙つてたからだらう…。

「良かつた……怒つて話してくれないかと思つた」
わたしは首を振つた。

一本目のチョコバナナをかじつて、

拓哉くんが話す。

「俺はお邪魔虫だからな。俺は居なくなつた方がいい」

「どうして？」

「俺がいたら、智輝は俺と亜由古をくつつける事しか考えない。

亜由古は亜由古で、俺がいたら俺しか見ない」

「…拓哉くん、亜由古ちやんの『持ちこ』……」

「うん、気付いてるよ」

さらつと答えた。

「なんだ…。

「…ちつき、キスされるかと思つたし」

わたしの胸が、大きくぞくくん、と鳴つた。
思わず胸に手を置いた。

まるで動搖してゐるみたい。

なに、今の……。

「…拓哉くんは、どう思つてゐるの？」

「なにが？」

「亜由古ちやんの事」

「……」

拓哉くんはそのまま黙ってしまった。

わたしは、まずこことでも聞いてしまったのだらうか。

「……俺にもや、分かんないんだよね」

「分からぬ?」

「うん……正直、どうなのが自分でも分からなくて」

「……」

「俺がいつまでもこんな事言つてるから、
一人が苦しんでんの、分かつてんのにな……」

拓哉くんは辛そうな顔をした。

なんでだろ?。

拓哉くんがこんな顔すると、わたしはとても心が苦しい。

彼の痛みが伝わってくるような感じ……。

さつき、智輝くんと話してたのとはまた、違う感じ。

わたしに何か出来ないのかな。

でも、よく知りもしないわたし
首を突っ込むなんて、

凶々しいと思われるよね……。

でも……

「拓哉くん」

「ん?」

「あ……」

やつぱり直むのが恥だ。
どうしようか
でも。

伝えたいと思つ。

「と、智輝くんは、拓哉くんに…幸せになつてもいいんだよ。
さつと、ただそれだけだよ。

だからね…気持ちには、正直になつていいと思つ…よ」

「智輝くんは、拓哉くんと、畠中かやんと、みんなが幸せになれ
ばいいって

思つて…自分を犠牲にしてるから…だから…だから、
せめて拓哉くんだけは、気持ちを正直にしてもらいたいかなつて…

「…………」

「う、ごめん!わたし、関係ないのに…」

「つづん」

拓哉くんは微笑んでいた。

胸が熱くなつた。

拓哉くんのあの顔一つで、
「ありがと」つて、
言われてるのが分かつたから。
言葉にしなくとも伝わる笑顔。
この人にはその力がある。

「俺は、亜由古が好きなのかも知れない」

「……うん」

「でもきっと、智輝に遠慮してると正直になる事は… アイツを裏切る気がして……」

「違うよ」

わたしはチョコバナナの棒を強く握った。

「自分の気持ちに正直になる事は、大切な友達を裏切る事じゃないよ。

素直になつたって、智輝くんは拓哉くんを、悪く思つたりは…絶対にしないから」

しばらく沈黙が続いたけど、

拓哉くんは、噛み締めたように答えた。

「……うん、そうだよな」

拓哉くんが力強く頷いたのを見て、わたしの中の何かが固まつた。

わたしは、この言葉を、

伝えなくちゃならない人が居る事。

気付けた。

わたしただつて同じ。

智輝くんと同じだよ。

咲波を悪く思つたりしない。むしろ、

ずっと傷つけてきたことを、謝りたいよ。

今なら出来る気がするの。

となりに、笑つてくれれる人がいるから。

「拓哉くん」

「ん？」

「あのね、わたしもこれから、正直になる」

「？」

「見てて……頑張れる気がするの」

彼が見ててくれる事が、

どうして自分の力になるのかは、分からない。

でも。

あなたがわたしに素直になつてくれたみたいに、
わたしもそんな自分でいたいと思つた。

それだけで理由なんて、十分だよね。

失恋

わたしは巾着の紐を解いて、
ケータイを取り出した。

咲波からの着信と、……雪斗くんからの着信。
凄い数。

二人の名前を見て、思わず息が止まる。
不安がつてゐる咲波の横には、
きっと今も、雪斗くんが付き添つてゐる……。
ううん。

振り切るように頭を振つた。
考へても仕方が無いから。

震える指で、ボタンを押した。

泣くかも知れない。
うまく話せないかも知れない。
辛くて、痛いかも知れない。
でも。

となりには、拓哉くんがいるから、出来る気がする。
この気持ちを信じたい。

番号を発信した。

耳にそつと当てると、呼び出しの音が聞こえる。
心臓が物凄い音を立てる。
息が上がる。

まだかかってもないのに、
すでに苦しくて苦しくて、

思わず今にも、逃げ出しちゃいたくなる。

出ないで、なんて、願つてしまつ……。

「……せ、もしも……わしづかへ……」

「せ、さなみ……」

声が震えた。

まずい、涙が溢れそつ。

泣いたら駄目。

今泣いたら、咲波が余計に不安になる。

でも……やばい。

声が震える……。

涙をこらえる為に、無性に身体が強張る。
無意識のうちにわたしは、

棒が折れてしまうんじゃないかつてぐら、
チヨコバナナの棒を強く強く握りしめていたらしい。

それに気が付いた拓哉くんが、
わたしから、そつとそれを取つた。

そして、

今度は空いたその手を、
まるでわたしを励ますよつこ、
ゆづくりと、握ってくれた。

あつたかい……

大きくて、骨ばつたしつかりした手。

その手は本当に、本当に

暖かくて、力強くて、

わたしの息が、自然と整つていいくを感じる。

今なら、落ち着いて話せる気がする。

不思議……。

「咲波、今ひとつ……？」

「…………」

「もつ、ここなんだよ。嘘ついて、やめよ！」

「夕貴…………」

咲波は電話の向こうで泣いている。

その声が苦しかった。

涙を流す彼女は、一体どれだけ苦しかった事だらう。

「ごめんね、さな」

「…………どうして夕貴が謝るの？悪いくのはわたしだよ」

「違うよ。やなは悪くないよ」

「だつて……わたしは……」

「ずるいのは、わたしだから。

本当はさなの気持ち分かって……

ずつとずつと苦しめてて、「ごめんね……」

自然と、頬を涙が伝う。

「ゆうやく、本当に、本当に」「ごめんね……」

「ここ…………もうこいんだよ」

「「「めんね……わたし、ちやんと……全部話すかい……」」

わたしはその言葉に、
目を閉じた。

雪斗くんの事、ほんとに好きだった。

雪斗くんは本当に素敵で、
わたしにたくさん、教えてくれたの。

どきどきする気持ち。

きゅんとする想い。

あつたかくなる心。

胸がいっぱいになる気持ち。

きつい胸の痛み。

苦しい日々。

寂しい気持ち。

ハラハラさせられたり、

そわそわさせられたり。

嬉しかつたり、励ましてくれたり……。

苦しくて、痛くて、切なくて、もどかしかつたけれど……

どんな時も、幸せだったの。

初めて人を想つた。

全部。初めて味わった気持ちだった。

ほんとはね、知りたいよ。

咲波の事、雪斗くんの事。

わたしは弱いし、決して良い子ではない。
人間だから、
嫉妬だつて、憎しみだつて、妬みだつて、
たくさん持つているよ。
問い合わせてやりたい。
追い詰めてしまいたい。
洗いざらい聞いて、
とことん謝つてもらいたい。
でも。
そんなの意味無いんだよ。
誰も幸せになれない。
ただ、こうゆう結果だつただけ。
わたしの好きだつた人が選んだのが、
たまたまわたしの大切な親友だつただけ……。
もつそれで、いいんだよね。
わたしの手から伝わつてくる優しい温度が、
わたしの心にそう問い合わせてくれている。
そんな気がする……。

「咲波……もう、いいよ
「…………え？」
「もうね、雪斗くんとの事……わたしは聞かなくとも
大丈夫だよ」

「……夕貴？……駄目だよ。

「とてもじゃないけど、そんな訳にはいかないよ。

わたし、ほんとに最低な事してるのに」

「ううん。だつて、わたしは咲波がそれ以上泣くの…耐えらんないよ。

それに、せつかく好きな人と両想いなんだよ？普通は幸せであるべきでしょ？」

「夕貴……」

「だからもう、泣き止んで。ね？」

わたしなら大丈夫。ほんとに平氣だよ。

……今も、一人じゃないから

わたしはそつと拓哉くんを見た。

拓哉くんはただ黙つて、

ゆらゆら泳ぐ金魚を見つめて、じつとしていた。

「一人じゃないって…夕貴、誰といいるの？学校の人？」「それは内緒」

「どうして？？気になるよ！」

「ひみつひみつ！今度絶対に話すからさ」

「えーつなに？凄い気になるじゃん」

「わたしの事はいいから、咲波。

今夜は雪斗くんと、お祭り楽しんで」

「夕貴……本当に…本当に」めんね

「もう謝るのなしだよー。まったくもう。

今度謝つたら、チヨコバナナおこりねー」

咲波がくすくすと笑う声が聞こえた。

良かつた。

咲波が笑つてくれると、わたしは安心する。

これで良かつたんだよ。

わたしの気持ちは穏やかだし、
咲波も雪斗くんも幸せなんだし。
良かったんだよね！

「ありがとう、夕貴。わたし約束するよ」
「なに？」

「ゆきちゃんへの」の気持ちと、」の関係を、絶対に無駄にはしないから」

「うん……わかった。その約束、覚えておくから……。
さあ、これから頑張るんだよ！ハツカレとー！」

「夕貴。本当に本当に……ありがとう」

電話を切った。

終わった。全部終わった。

お祭りでの一騒動も。
涙も。悩む心も。迷う心も。
痛くて、苦しい胸も。
着信の嵐も。
わたしの想いも……。
中一からの、想いも……。

わたしの恋は、終わってしまった……。

パタ……パタパタ……。

「あ、あれ……」

わたしの目から涙が流れていた。

あれ……なんで……。

悲しくも、辛くもないのに。

無意識に、ただあふれる。あふれた涙が、

次々とわたしの手をにぎる拓哉くんの手の甲に落ちる。

「「」「めんね！やだな……なんでこんな泣いてんだろ？」「焦つて目を擦つた。

だけど、その手を、拓哉くんが掴んで静止した。

「いいじゃん、泣けば」

わたしを見る彼の目は、驚くほど、真っ直ぐ……。

「俺は「」にも行かないよ。夕貴の気が済むまで「」にいるよ。だから泣きなよ。……ずっと、好きだつたんだろ？」

バタバタと落ちてく、涙の音を聞いた。

「……………ん……ん……」

声は震えた。

視界はゆがみっぱなし。

「本気で想つてんなら、涙が流せない方が、よっぽど失礼なんだ」

もう我慢できなかつた。

ずっと頑なに閉じていた何かが、

ゆっくり解けてしまつていくかんじ……

わたしは顔をゆがめて、

力いっぱい歯を喰いしばつて、

それでもそれでももれる声を、

我慢することはもう出来なくて。

ぼろぼろと流れ出す涙を、全部受け入れた。

無駄にしないように、

必死で、色々な想いや気持ちを込めて泣いた。

一滴たりとも、無駄にはしない。

全部流れてしまつてほしい。

もう泣かないで済むように。

わたしが人を好きだつた気持ちを、

誇れるように。

次の恋が無事に受け入れられる様に、
心に場所を空けてもらひう為に。

暖かくて、大きな手が、

わたしには余計に切なくて、

いつの間にかわたしは、

ワンワン声を張り上げて泣いていた。

周りの人気がジロジロと見た。

金魚屋のおじさんが迷惑そうに睨んだ。

それでも泣いた。

拓哉くんはそばにいてくれたから。

泣いているわたしを恥ずかしいとも、うるさいことも言わず、

ただずつと付き添ってくれる彼の大きさに、
わたしは甘えずには居られなかつた。

泣いてる胸の中は、
いつの間にか
「ありがとう」で、
いっぱいだったんだよ……。

祭りのあと

「家まで送るよ」

「うそ……ありがとう」

拓哉くんは、わたしの手を引いて、

ゆっくり歩く。

家の前まで着くと、その手をそつと離した。
少し汗ばんだ手に、生暖かな風が触れる。

「じゃあ、俺は行くから」

「うそ……本当にありがとう……」

「…………」

俯いたまま。

次の言葉も、

次の一步も、出ないまま。

何かを期待してるから?

何か、ほんとは言いたい事が
あるから…?

それは、お互いに、きつい。

思い切って顔を上げた。

”このままじゃ嫌だ”って、何かが強く思つてゐる。

- 1 -

でも……。

もうそこには、誰も居なかつた。
唯、空一ノマリ。

話もしない

従は 潤えてしまつた：

「また、会いたい、」

目に映るのは、いつも天井と、四角い部屋。

深い深いため息と、重い脱力感。両手で思わず、顔を覆つた。

もつ回向日。

いい加減にして。こんな夢。

わたしの脳みそは、一体何を思つてこんなもの見せるのだろう…。

のつそり起き上がつて、机の上の卓上カレンダーを見た。

お祭りからは、今日でもつ、三週間もたつた。
早いな…。

今日から新学期。

「おはようー・夕貴」

チャリで駅まで向かうと、咲波と雪斗くんが立っていた。

二学期からは、朝の登校に新入りが入つた。

「おはよう。いやー、二人とも真つ黒ですねー!」

「ゆう、それ二日前にも聞いたよ」

咲波がくすくす笑つた。

「夕貴は焼けなさすぎじゃねーの?」

雪斗くんもはにかんだ。

「いいのー。わたしは美白美人になるの!」

わたしの言葉に、今度は一人して笑つた。

咲波と雪斗くんは、一緒に海の家でバイトをしていた。

雪斗くんの親戚がやっているお店らしい。

一日前、わたしも友達と一緒に食べに行つたのだ。

真っ黒に日焼けした一人はお似合いで、

そんな二人を見ているだけで、気持ちが暖かくなる。

まさか、こんな形で三人して歩く日が来るなんてね。夏休み前には、本気で有り得ない事だった。変なの。

そんな事考えると、頭を掠める。

今朝も見た夢」と……。

学校に着いたけど、
わたしは始業式に出る気分にはなれなかつた。

屋上の日陰でぼーっとしていた。

空は真っ青な快晴で、

雲ひとつない。

目を閉じても、開いていても、

眩しかつた。

「夕貴ー？いる？」

声のする方に顔を向けると、
入り口からそつと、咲波が覗いていた。

「さなーいるよ」

「あつーこらー、サボつたらいかんでしょ」

「人の事言える？」

”あはは”と笑って、咲波が入ってきた。
わたしのとなりに、腰を下ろした。

「どうしたー？夕貴

「なに？ いたたつ」

いきなり両頬をぎゅうっとつねられ、目を見開いた。

「！？」

「何年友達やつてると思つてんだ！トボけてもダメーー！」

パツと開放された頬を、思わずさする。

「心配してくれたんだ、ありがと……」

咲波に話した。

お祭りの日のこと。

”拓哉くん”といつ、男の子の事。

……夢のこと。

「そつかあ……そんな事があったのか」「うん……」

「いめんね夕貴。もつと早く、気が付いてあげれば良かったね」「さながら謝らないで。別にあたしは平気だよ」

「嘘ー平気なもんか、そんな顔して」そつと頭を撫でてくれる咲波の手が、とても温かくて、ほつとする。

目が、じわあつと熱くなる……

ぽろりとこぼれた涙に、自分自身ではつとした。

「や、やだな……なにこれ」「夕貴……」「やだやだ、もひひうでもいいの」「夕貴」「あの時、こいつの人がだつたの……だから……」目を擦れば擦るだけ、どんどん溢れてくる。わたし、こんなに思いつめていたの？

「夕貴、近所に住んでるんでしょう？また会えるよ。諦めないで期待しよう、よう、ね？」「無謀だよ。近所なんて、あまりにも漠然としちゃう」「そつかなあ……地元の高校を風漬しに探せば、どうかでヒットするんじゃない？？」「うん……」

「ちゅうと……それ、ストーカーだよ?」

「こんな事ばっかり言う咲波が傍にいる」とで、私は本当に救われるの……。

昼過ぎ。

駅で一人と別れて、わたしは自転車をこいだ。九月に入つたのに、暑さはほんとに容赦ない。あまりの暑さに、アイスが食べたくなつた。近くの「コンビニ」に寄つた。

レジでお金を払つてゐる時、

ふと思ひ出した。

このすぐ近くに、気持ちの良い木陰のある、素敵な公園がある事を。

「.....」

アイスと一緒に、サンドイッチとお茶も買つて、コンビニを出た。

自転車は「コンビニ」に置いたまま、公園まで歩く事にした。

その公園には、

大きな木がたくさん立つていて、
一番大きな木の下に、ぽつん…と、
一つだけ緑のベンチが置いてある。

わたしはその場所が、子どもの頃から大好きだった。

少しだけ、今の憂鬱^{うみやく}が晴れるかもしれない…。

そう思うと、

久々に行く公園に、ちょっとわくわくした。

公園までの一本道をぐんぐん進む。

入り口が見えてくる。

お腹も空いたし、暑いし、早く座りたいし。

公園に一歩踏み込んだ時。

わたしは全身が、ガクン、と硬直した。
持っていた袋を落とした。

「.....」

緑のベンチ……。

どうして……。

涙が頬を伝つた。

紛れもなく。
彼が、
そこにいた。

サイカイ

ぐらぐら揺れる視界に、確かに移る。

茶色い髪。

優しい目。

広い肩。

大きな手。

間違えない。

間違える分けない。

見間違えたりしない。

一夜だけの、たった一時のあの瞬間が、
わたしを毎夜悩ませるほど、
わたしには…

キラキラと焼きついてる。

そつとまぶたを閉じると、

あふれた涙が、ぱちん、ヒローファーを打つた。

同時に。

彼がふと、私に向いた。

目が合つた。

「

「.....」

私の視界に映る彼の目は、
みるみる内に見開く。

彼は突然、何かに弾かれる様に、ぱつと立ち上がった。
立ち上がったその背の高い、細い身体。

絶対にやう。

そこにはいるのは、紛れも無く、
”拓哉くん”。

「ゆ、夕貴……ちゃん」
懐かしく通る声に、心が包まれる思いがした。
あたたかい声。

両手で涙をぬぐつて、頭をふつた。
何泣いてんだか、恥ずかしい……。

「覚えてるの？わたしの事」
「うん、もちろん。そっちは……」
「覚えてるよ。拓哉くんだよね」
「あはは……うん。覚えててくれたんだね……」

しばらく沈黙になる。

だって、何を話せば良いのかわかんないよ。

久しぶりだけど、それだけだし。

接点とか無いんだし…。

「…………」

「…………」

「…………」

「夕貴ちゃん、もしやアイス買った??」

「???…うん、買つたけど…」

「袋からたれるその雪の量から見て、完全に溶けてるよ」

「え?…あ―――っ―――」

ぎょっとして、地面に落ちた袋を見ると、そこには見るも無残な光景があつた。

コンクリートが水で色を変えていた。

慌てて袋を拾つて、中を覗いて……心底愕然としてしまつた。

……大ショック! 憂い楽しみにしてたの!!。

「夕貴ちゃんて案外抜けてんだなあ」

カラカラと笑う彼が、憎らしい。

誰のせいだよ、誰の!

「いいね、そつねつの」

「何が?」

「IJの前は泣いてるところしか見れなかつたから」

「…………」

何だか、一瞬どきつとした。

あの夜は、相当自分にとつて、特別みたいだ……。

「アーニー、諸君、ハーバード、

「ア... キムニナガ。嘘だよ」

いいから、いいから。行くわ」

どうしようか困って、慌てて自分もつこつていつた。

5 分後。

買つてもらつた。アイス。

また奢つてもらひちゃつたよ。

「うれしいですね。」「めんね……なんか」

「んー。ごめんね、よりも、”ありがとう”のが嬉しいかなあ」「あ、うん。ありがとー

何も言わずに笑つた彼の顔に、しばらく視線を取られる。

「あの公園ね、小さい頃から大好きなの。緑のベンチが特に」

「マジ? わんなじー!」

- 本三？

「俺もあの場所好きなんだよね。なんか安らぐってゆーか……自分の気持ちを、軽くしてくれそうな気がすんだよー

自分の気持ちを轉くしてくれそうな気がするた
氣持ち分かる：わたしも同じ」と考えた。

だからあの公園に行つたから…。

「……拓哉くん、何か悩みでもあるの？」「ん？ どうして？」

「あ、ううん。何でもない、『ごめんね……』」

アイスをかじった。

ふと見た彼の表情で、なんだか伝わってしまった気がした。何か、悩みを抱えてるんだってこと……。

「俺、そろそろ行かなくちゃ」

「え……」

「智輝くんとこに行かなくちゃなんねーんだ。覚えてる？ 智輝」

「うん。幼馴染でしょ？ あの金髪の……」

「そりそり！ これからアイシン家に借りに行くんだ」「そつか。あ、アイス本当によいもんね」

「うん、いいよ」

拓哉くんは、最後の一口を口に入れて、棒を捨てた。

わたしはそれを見ていた。

……見ていた。

……見ていくしかなくて、固まっていた。

神様。

「これは……これはチャンスですか？」

つて、聞くまでも無いこと。

何も言えないと終わるの？

何も出来なして終わるの？

今度こそもう、

一度と会えないかも知れないんだよ
？

「それじゃあね」「

う、うん、……ば、ばい、……

彼は背を向けた。

- 1 -

歩を出しちゃった。

[REDACTED]

どんどん、どんどん、

離れていく

行つてしまふ。行つてしまふ

「あわせ！」

彼が、ずっと向こうで、立ち止まつた。

まさか。

わたしの方に、戻つてくる。

「あ、あのや……」

「うん……」

やけに胸が高鳴る。

「あのや……水族館、スキ？」

「水族館？」

「行かない？一緒に」

「…………」

わたしは首を縦に振つていた。

アドレスを、交換した。

木の葉二丁目公園、ありがと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8489a/>

ハツコイ

2010年10月28日02時40分発行